



Title	「道明寺鶏鳴説話」をめぐって：天神縁起絵変容の一側面
Author(s)	鈴木, 幸人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 126, 1(右)-36(右)
Issue Date	2008-11-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34981
Type	bulletin (article)
File Information	SUZUKI.pdf



[Instructions for use](#)

「道明寺鶏鳴説話」をめぐる

——天神縁起絵変容の側面——

鈴木 幸 人

一、道明寺鶏鳴説話と天神信仰研究への視点

一一 道明寺鶏鳴説話の概要

本稿で採り上げる「道明寺鶏鳴説話」は、菅原道真（八四五～九〇三）に関わる伝承説話のひとつであり、その梗概を紹介すれば、次のようなものである。

右大臣・菅原道真は、左大臣・藤原時平の讒言によって、昌泰四年（九〇二）一月二十五日、大宰権帥へ左遷される。筑紫配流の途上、河内国・土師里（はじのさと）（現在の大阪府藤井寺市）に住む伯母・覚寿尼のもとを訪ね、別れを惜しむ。自らの「似姿」を残すが、夜明けとなって、「鶏鳴」に促されて出立する。その時に一首の歌を詠じる。

「道明寺鶏鳴説話」をめぐって

鳴けばこそ 別れもうけれ 鳥の音の なからむ里の 暁もがな^①

(朝を告げて鶏が鳴く時刻になったので、旅立たねばならない。明け方の鶏の声のないところはないものだろうか。)

この「似姿」が今の道明寺天満宮のご神体として祀られているものであり、また「鳴けばこそ」の歌のゆえにそれ以来この地では鶏を飼わない、という。

以上のような、道真の左遷途上の一説話であり、しかしたいへん著名な説話である。

「土師里」は、その名のとおり、「土師氏」(菅原氏の先祖)^②ゆかりの地であり、現在、道明寺には道真自刻と伝える「十一面観音菩薩立像」(国宝)、道明寺天満宮には道真所用の遺愛の品々(「伝菅公遺品」、国宝)が伝わるなど、道真その人(というより次の呼称にこそ、人々の思いが込められると思われるが、「菅公」その人)への敬愛・尊崇の情が強い独特の天神信仰が育まれた地域ということができらるだろう。

さて、「道明寺鶏鳴説話」をはさんで、道真をめぐる物語は、周知のように展開することになる。

道真は大宰府に謫居、失意のまま彼の地に没し、その後、都には災害や不吉な出来事が相次いだ。それらは「菅霊」の祟りとみなされ、それを鎮めるため道真の官位を復し、都には「北野社」(北野天満宮)を創建して、道真を神として祀ることになる。現在までその性格に変容をきたしながらも連綿とつづく「天神信仰」の始まりである。

こうした一連の物語(菅原道真の生涯、没後の怨霊の活躍、道真を神としてまつる北野社創建、その利生譚)は、鎌倉時代初頭までに「北野天神縁起」としてまとめられた(その呼称が端的に示すように「北野」天神創建へと収斂していく)と考えられており、絵画を伴う「縁起絵巻」としても制作された。その後、天神信仰の広がりにつれて、

天満宮は各地に勧請され、その勧請の証しとして天神縁起絵も各地の天満宮に数多く制作奉納されたことが知られる。⁽³⁾
しかし、これもまたよく知られるように、天神信仰には、単に「菅霊」を祀るというだけではない、それ以前から天神ないし雷神信仰の土壌があり、また道真の神格そのものにも早い段階から多面性が認められるなど、当初からその神格に複雑な様相をもつものであった。⁽⁴⁾とくに時代が下がるにつれての神格の変容は、信仰のあり方を変化させ、それに伴って、その物語を変質させ、それを表わす造形を変容させることになったと考えられる。

たとえば、その縁起、物語についてみた場合、たしかに「北野天神縁起」を基とはしながらも、それとは別の天神ないし道真についての物語を作り出そうとする動きが存在する。本稿で話題にする「道明寺鷄鳴説話」は、近代に至るまで採り上げ続けられる菅公左遷説話のひとつであり、そうした別系統の物語ということができるが、かかる縁起や説話について考察することは、天神信仰の変容の一端を解き明かすことになると思われる。⁽⁵⁾

こうした立場から、本稿では、これまでの調査で管見に及んだ「道明寺鷄鳴説話」を収載する「天神縁起」、「縁起絵」、「絵本読本」等のテキストおよび画図を紹介しつつ、若干の私見を述べてみたい。

一―二 道明寺鷄鳴説話と史実

「道明寺鷄鳴説話」は、通常の「北野天神縁起」には収録されていない説話であり、しかし、後に、とくに近世以降のいわば「天神伝承」、「菅公物語」には、およそ欠かせない挿話として人口に膾炙することになる。このことは上記の観点から考察するうえで、まず初めに注目されるべき点であり、そして結局、最も重要な点であろうと思われる。

しかし、残念ながら今のところ、「道明寺鷄鳴説話」の成立時期は特定できないとせざるを得ない。「道明寺鷄鳴説

話」が「天神縁起」（ないし天神縁起絵）にしばしば登場するようになるのは、江戸時代になってからで、それ以前には、管見のおよぶ限り、天神縁起絵巻諸本（甲・乙・丙・丁類）はもとより、御伽草子系統を含んでもその作例は見当たらない。近世以前に遡る可能性のあるのは、「道明寺縁起」と『菅家瑞応録』（いずれも後述）であり、また謡曲「道明寺」があるばかりである。

では、「史実」としては、どうであろうか。以下、竹居明男氏の論考⁽⁸⁾に導かれながら、確認しておく。

道明寺と道真の関係では、道真の参詣、伯母覚寿尼とのかかわりが語られるが、これらは近世の「道明寺縁起」「道明尼律寺記」等に記載されるものであって、覚寿尼の実在も含めて史実としては問題が多い。道真自刻という二軀の十一面観音立像⁽⁹⁾に関する伝承も江戸時代のものであって史実としての確証は得られない、という。

こうした状況ではあるが、いくつかの手がかりが存在する。

第一に、延慶三年（一一三〇）六月一日の日付をもつ「鏝阿の置文」⁽¹⁰⁾によると、伝法灌頂の「誦経導師」を勤めた鏝阿に「天満天神」が影向して「道明寺宝藏中重宝等者、我昔留心所遺置也」と告げた。現在の伝菅公遺品が「宝藏中重宝」に該当するなら、道真遺品伝承は十四世紀初頭にまでさかのぼることになる。第二に、宇多上皇の大和・河内・摂津御幸。これは昌泰元年（八九八）十月二十日から閏十月一日のことであるが、道真も供し、「雨中衣錦故郷帰」と詠んでいる。第三に、藤原道長の高野山参詣。治安三年（一〇二三）十月十七日から十一月一日のことで、国司河内守菅原為職（道真の曾孫）の道明寺における接待が記録されている。第四に、惟宗孝言の七言律詩「過道明寺有感」（『本朝無題詩』巻九収録）があり、その第五句「檀那昔至留神跡」に対して自注「菅大相国依為檀越、昔日屢来此寺、而文書神跡猶残、故有此句」とあることから、道真と道明寺の関係が知られていたことがわかる。また、院政期から

南北朝期、道真の子孫から少なくとも5名の人物が道明寺の別当または権別当に任じられていることが判明している。以上のことから、「平安時代以来、菅原氏の氏寺とも称された道明寺を舞台に、とくに天神道真との関係においても、具体的なモノ——すなわち「神跡」や伝菅公遺品に代表されるような（ただし、それらが本当に道真自筆、あるいは道真所用であつたかどうかは、別問題である）——を通じた、一種の天神信仰がおそらく平安中期以降には発生・展開していった事實は認められてよからう。」と結論される。そして土師里および道明寺は、かかる信仰の形態を発展させていくことになるのである。それは竹居氏もしばしば指摘されるとおり、北野（京都）や太宰府（福岡）、吉祥院（京都）、防府（山口）、また荏柄（鎌倉）とは、性格を異にする天神信仰が、土師里・道明寺に形成されることを示すものである。逆に言えば、上記の地域がそれぞれに違った信仰形態を形成し、今まで保持しつづけてきたという事実こそ、天神信仰の他の神祇信仰には認めにくい特徴であるといえるだろう。

二、「道明寺縁起」

二一「道明寺縁起」の内容と諸本の異動

ご当地・道明寺の縁起である「道明寺縁起」の語るところを見ておくのが順序であろう。「道明寺縁起」には、既に紹介指摘されるように、数本が伝来する。¹¹⁾

(A) 道明寺所蔵『道明寺縁起』写本一冊十三丁（包紙に「道明寺縁起原稿」）

(B) 道明寺所蔵『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』絵巻三卷（外題に「河州道明寺縁起」）

「道明寺鶉鳴説話」をめぐって

- (C) 道明寺天満宮所蔵『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』絵巻三卷（外題に「道明寺記贍」）
- (D) 道明寺所蔵『道明尼律寺記』写本一軸
- (E) 『佛教全書 寺誌叢書第三』所載『河州志紀郡土師村道明尼律寺記』
- (F) 内閣文庫所蔵『道明寺縁起』写本一冊

これらの関係であるが、(B) (C) の絵巻二本は、詞書・図様、ともにほぼ同一の内容を持つ。(C) の外題の「贍」の表記、および両者の絵の描法を比べると、(C) が (B) の写しとするのが妥当であろう。ただし本文については、(C) から (B) へ若干のしかし重要な省略があることが指摘されている。(D) (E) (F) は詞のみであるが、(B) (C) の絵巻の詞書を写したものであり、(B) (C) (D) (E) (F) の本文は同一とみなしてよい。つまり本文については、(A) と (B) の系統があるということになり、(A) 冊子本が原本の書写本と思われるものながら最も古体を示す。(B) が叡覧（享保十二年（一七二七）に実現）に向けて制作され、実際の叡覧に際してその控えとして「写し」が作られ（(E) 佛教全書本）、通常の閲覧・披見のために説明的考証的傾向の強い詞書をもつ (C) 天満宮本が作成されたと考えておきたい。

それでは、(A) 冊子本に語られるところの、道真と道明寺、土師里との関係をみてみよう。

ここでは文字どおり「道明寺の縁起」として、左遷途上の「鶉鳴説話」だけでなく、それ以前からの道真と土師里との関連、それに発する奇瑞、靈驗譚が語られている。

便宜的に項目を挙げれば、次の如くである。（ただし (A) 冊子本は末尾を欠いている。）

（上巻） 伯母覚寿尼のこと、道明寺改名、天神御冠、十一面観音制作、白山権現化現、五部大乘経書写、春日八

幡熊野権現化現、天照八幡春日明神化現、石唐櫃、木櫛樹奇瑞、阿字観、誉田八幡参籠、宝剣授与、楊枝御影

(中巻) 左遷配流、道明寺訪問、似姿木像、十人化人、形見品々、北の方来訪、飛梅、鶏鳴

(下巻) 安楽寺、恩賜御衣、遺愛品々、瑠璃壺由来、鏝阿八葉鏡勅封、田代寺尊性・白太夫(以下欠)

(A) 冊子本から(B) 尼律寺記へは、内容の整理簡略化が進められているのだが、ここで、史実との整合性もあわせて、「鶏鳴説話」以前(左遷以前)の内容について、(A) 冊子本と(B) 尼律寺記の相違に触れておく。

まず、「阿字観」「誉田八幡宮参籠」について、(A) では「丞相四十五歳」とのみ記され、それは「仁和五年(八八九)」にあたるが、(B) では「仁和二年(八八六) 丞相四十二歳」とされて相違する。ただしこの時期、仁和二年(八八六) 三月二十六日から寛平二年(八九〇) 春まで、途中帰京した時期はあるが、道真是讃岐守に在任しており史実とは矛盾する。

つぎに、「木櫛樹奇瑞」についても、大乘経を納めたのが、(A) では「仁和四年(八八八) 丞相四十四歳」と限定されるのに対して、(B) では「元慶八年(八八四) 菅丞相四十歳」五部大乘経書写がなされ、その後、木櫛樹の奇瑞と記す等の相違がある。しかしそれ以上に重要な相違は、「伯母・覚寿」についての記述であろうと思われる。

二二二 「伯母・覚寿」

一方の主役「覚寿尼」はその実在も疑われるのであり、道真とは「おば」「おい」の関係とされるが、誰の「きょうだい」とされ、どのような人物として「道明寺縁起」に登場するのだろうか。

覚寿は、道真の「伯母」とのみ表記されることが多く、例えば(A)冊子本では、「天神のおんおばご覚寿比丘尼」とされるだけで、父方か母方かを明示しない。しかし、(B)尼律寺記では、「菅参議是善卿のいもうと覚寿比丘尼」と、道真の父・菅原是善の妹(女のきょうだい)であることが示される。続けて、「いとけなきより出塵のころぞしふかくましまして、御氏寺なればとて當寺においてついにかぎりをおろし」とあって、覚寿は「氏寺である土師寺」で出家するのである。そして「このゆへに菅丞相いとど檀信あつうして、おほやけのいとまあるごとに、よりより當寺へ來りて、坐禪、誦經などすべて仏門の事とりおこなひ給へり」とあり、覚寿と土師寺の結びつきは、それを媒介に、道真と土師寺を強く結ぶためにも是非とも必要なことであつたと考えられる。こうした理由から(B)尼律寺記において、覚寿は菅家の人でなくてはならなかつたのだろう。

しかし、成立を近世以前へ遡らせることが可能であるとされる『菅家瑞応録』¹³⁾ではそうは書かれていない。

『菅家瑞応録』には、覚寿に関する節が二か所あり、ひとつは「紀名虎逝去 叔母君出家事」、いまひとつが「菅公訪叔母君事」である。前者「紀名虎逝去 叔母君出家事」は、「清和帝貞観二年(八六〇)庚辰年、菅公十六歳」の時、当時三十六歳であつた叔母が夫の死去を受けて出家し、覚寿と号し、菅原是善の御知行所である土師里、聖徳太子の建立の道明寺に入ったこと。道真が毎月文を送つて叔母を慰めたこと等が記される。また後者、「菅公訪叔母君事」は、いわゆる「道明寺鶏鳴説話」で、その冒頭に、「抑も此叔母君は伴氏にて菅公御母方御叔母にて衛門の君」とあって、覚寿は「道真の母の妹」であつて、「伴氏」であるとして明示される。夫が「紀名虎」、覚寿が「伴氏」であることは、「菅原氏」をはじめとして、藤原氏によつて政界から駆逐されていく古代以来の氏姓の立場が象徴的に配されているように思われる。(『菅家瑞応録』の立場・性格も示すことになるだろうが、この点については現段階では指摘するにとど

めておく。

また「菅公十六歳の御時教化有て御出家有り、即御名を覚寿尼公とそ申しけるか、菅公御在官の内は月々に言信し玉ひ、又自ら彼の寺に詣玉ひ、或法華、維摩等の五部の大乘経を紺紙金字に書写し、或いは行道念仏修して、御両親の菩薩を祈り、自行の覚位を願ひ玉ふ」とされ、先述の道真十六歳で出家を勧めたこと、道真が公務の間にしばしば便りを送り、彼の地に訪問、仏事を行い(大乘経書写や修行など)、亡き両親の菩提を弔うことが記される。さらに、「菅公の御両親は先きに逝去し玉ひければ、此尼公を以全く真の御母君と親み玉ふ、御叔母君にも菅公を実子の如く思召」として、覚寿と道真の關係が「本当の母子の如く」であったというのである。

この点、『菅家瑞応録』の覚寿をめぐる記述が語るところは、道真伝説の後の展開にとつても重要な要素である。ひとつには、「道明寺鶏鳴説話」が、まさに親子(母子)の別離を象徴するものとなり、またひとつには、道真が俗に言えば親孝行な人物であったことを示す重要なエピソードとなるからである。¹⁴⁾

史実では、道真の母は、夫(道真の父)是善に先立って(貞観十四年(八七二)一月)死去している。それに際し、吉祥院で法要が企図されたことも知られる。また、「母子の別れ」というプロットは、後に浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』の菅丞相と刈屋姫の親子(ここでは刈屋姫は覚寿の娘で道真の養子という設定)の別れに発展するといえる。

二一三 『道明寺縁起』の「鶏鳴説話」

「道明寺縁起」にもどって、「鶏鳴説話」について見ていこう。

(A) 冊子本の「鶏鳴説話」を、長文にわたるが、重要と思われる部分を引いておく。(引用は『藤井寺市史補遺編』

「道明寺鶉鳴説話」をめぐつて

による。）

○かくて、御おぼ覚寿に御対面ありて、「此度筑紫へ流さるる事、余の儀に非ず。時平の讒奏、疑なし。」と、云ひも果てさせたまはず、御涙にむせびたまふ。覚寿も御涙を押さへ、「今まで命永らへしも、菅丞相たのみ奉りそぞかし。筑紫へ移らせたまひなば、片時も世には永らへじ。我諸共に連れたまへ。さなくば、命も惜しからず。」と思し召し、切たる御気色みせ給へば、丞相、覚寿の御心をなだめて仰られけるは、「たとい千里を隔つるとも、いささか変る事あらじ。其上、いとけなき女を、是まで具して参りたり。御弟子に遊ばして、是を形見に御覧じて、御法を伝へたまわりて、我が菩提を訪わせ給へ。」と、ねんごろにのたまへば、覚寿も岩木ならねば、これに心を慰さめたまふ。しかはあれども、「願はくは、菅丞相の御姿を写し置かせたまわれ。」と、ひたすらに仰せありければ、「さあらば、我に違わぬ形を造らん。」と思し召す折節、にわかにかき曇り、雷電おびただしく振動して、天より一つの木振り下るこそ不思議なれ。

○そくじに姿を刻まんと申し召して、御姿見の鏡を立て、かの降りたる木に向はせ給へば、忽然とくぎやう十人來たりて、各々並みゐて、造り給ふ。菅丞相ともに十一人なり。元より丞相は十一面觀音の化身なれば、世に本意を知らしめんために、十一人に現われ、暫時に御影出来させ給ふ。

○その後は、御影を覚寿へ參らせたまふて、仰けるは、「我なつかしき折節、仰せられたき事あらば、何事にても此像に告げ給へ。たとひ筑紫にあるとも、言葉をかわし申べし。」その上、形見をさまざま残し參らする。

一 御劍 これハ誉田八幡宮より与えさせ給ふ御宝劍なり。

一 冠 筑紫へ降る上は束帯の道具共ごとく、形見に残し奉る。

一 装束 一 平緒 一 石の帯 一 笏 これハ時平をうちし笏也。

一 姿見の鏡 一 櫛匣 おなじく櫛 濃紫もとゆひ、びんかがみ二掛。

一 小刀 是ハもく像を造りし小刀なり 一 舍利 五色こんどうに入。

此品々ハ朝夕身を離さづ、手馴れし物共にてさむらふ。形見はあだなると、かこちしもさる事なれども、又ハ御覽じて、御心を慰さませたまへとて、御涙と共に参らせたまふ。

○さる程に、都に留まり給ふ北の御方、余り御別れの悲しく思し召し、忍びて道明寺のあたりまで御後を慕ひたまひて、御使を遣わされて、その文に、「都を出させたまふ折節は、御別れの悲しさに、涙にくれて出たさせ給ふ御姿をも、見送り参らせ侍らず。今一度御見参。」と、書き留め給（ふ）。菅丞相、御文を御覽じて、

今更にうとむには非ず 君なくて哀れやとすると習ふなりけり。と、

御返事あそばして、御対面もなく、都へ返させたまふ。

○扱、日頃は寵愛の梅の事まで、思し召し出させたまひて、

東風ふかば 匂い起こせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ と、

詠じさせ給は、都の御庭の梅一夜の中に飛び来たる。今当所にある常成の梅こそ、此御詠の飛梅なり。

○かくて、夜のふけぬらんと、いとど御名残り惜しう思し召す折節、八声の鳥告げわたれば、御（冠）ふりを、かたふけさせ給みて、

なげばこそ 別れも憂けれ 鳥の音の 無からん里の 暁もかな と

遊ばして、涙ぐませ給ふを、覚寿御覽じて、「千夜を一夜に今宵しも、とりわき速きこへこへをかこつも涙の種ぞ

「道明寺鶉鳴説話」をめぐる

かし互ひに物ものたまはぬ御心の内思ひやるたにも絶へぬは涙ばかり也それより此在所に鶉の育たぬは、「無からん里も在らばしも」との御詠歌の故とかや。

○「やうやう明星あがらせ給ふ。」とあやこ申上れば、都を出し時よりも増さりて心憂くさむらへど、「何時までも御名残りは尽きすまじ。」とて、御暇乞いあそばし立別れたまふ。覚寿の御嘆き、いひ知らずあわれなり。御出の日より三十日の間は、道明寺御領内の竹木はみな地に伏し、鳥獣は難波の浦まで、御あとを慕ひて、御船に召させ給へば、声々に御名残りを惜しみ、御船の見ゆる程は、岸にひれ伏して、日の暮るる比には、皆行方知らずぞなりにける。

このように（A）冊子本には、左遷途上、道明寺へ立ち寄った場面が詳細かつ情感をこめて語られていると思われる。また注目されるのは次の事柄で、これらはいずれも（B）尼律寺記には省略された内容である。

- ・覚寿が筑紫へ連れて行ってほしいと懇願したこと。
- ・伴ってきた幼い女子を覚寿の弟子にしようとすること。
- ・北の方が道明寺近くまで忍んでくるが会わずに返したこと。
- （ちなみにこれらを合わせると、浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」、菅丞相と苅屋姫の話ができるだろう。）
- ・似姿を制作するときに雷鳴があり天から木が降ってきたこと。
- ・似姿に話しかければいつでも言葉を交わすと言いつ残すこと。
- ・道明寺で「こちふかば」と詠む「飛梅」説話。

こうした内容および語り口は、道真と覚寿の深く親密なかかわりを描き出すに十分な効果を示していると思われる。(B) 尼律寺記の客観的なしかし幾分よそよそしい語り口とは異質なものと見えるだろう。

さて、ここで触れておきたいのが、道明寺天満宮に所蔵される「天神縁起絵扇面貼交屏風」であつて、六十枚の扇面に描かれた天神縁起というまことに珍しい作例である。¹⁵ つとに指摘されるように、絵画の様式の異なる扇面があるのだが、そのうち、とくに扇面番号15番「従土師里赴太宰之図」の場面で「東風ふかば」と「桜花ぬしを忘れぬ」の二首を詠むというのは、通常の天神縁起では見られない。この二首は、天神縁起の通例では、京都の紅梅殿での北の方や子供達との別れの場面（ないしは後世の作品には太宰府）で詠まれるものだが、扇面屏風本では土師里、覚寿尼との別れの場面で詠むのである。この扇面は画風の違いから、後から描き加えられたものとも考えられるのだが、扇面縁起の道明寺への施入の後、(A) 冊子本の記述に基づいて描かれたと考えてよいであろう。¹⁷ なお扇面屏風本との比較材料として、国学院大学図書館所蔵の卷子本を挙げておかねばならない。国学院巻子本は、扇面本に描かれる建物の斜角度をそのまま写している場面が多数あり、扇面本の写し、ないし共通祖本の存在が想定されるものであるが、その同場面では、詞書はほぼ同内容ながら、絵は道真と覚寿、梅桜樹ではなく、道明寺の伽藍が描かれるという相違がある。

二一四 「鶏鳴説話」と類似の説話 「綱敷天神」「明石駅長」

「鶏鳴説話」同様に、「北野天神縁起」にはなく、後に人口に膾炙する説話のもう一つの例は、「綱敷天神」説話であ

「道明寺鷄鳴説話」をめぐって

る。これらの共通点は、道真左遷途上の説話であること、民俗的要素を含むと考えられることである。例えば、「綱敷天神」の綱、グルグルと巻いたあの綱の形態は、蛇のとぐろを象徴すると予想され、道真以前の天神信仰¹⁸にも繋がるものと思われる。ただし大きな相違点は、綱敷天神が、「東帯天神坐像」の一形式として、絵画の単独像として、大きな位置を占めるようになることである。つまり、「怒り天神」のひとつである「綱敷天神像」は天神信仰の「古層」とつながる接点と考えられる。

また、「明石駅長」説話には土師里の鷄鳴説話とのいくつかの対比的な要素があると思われる。ともに道真の左遷途上に、その流浪の身を歎く人物が登場し、その人を、逆に道真が慰め諭しするという内容である。土師里の「内地」と明石の「海辺」、「尼（女性）」と「駅長（男性）」、道真が詠むのは「和歌」と「漢詩」、等々。菅公道真の人となり語るにふさわしい、情景も対比的な二場面であって、後世の縁起類で、ほとんど必ず、左遷配流の途上、土師里・明石というセットで描き出されるのも故のなことではないように思われる。また天満宮縁起絵伝（太宰府十二幅本）の図様の混乱が認められるのもこの故であつたろうか。¹⁹ これらの問題については今後更なる検討を試みたい。

三、「道明寺鷄鳴説話」を載せる天神縁起、縁起絵、絵本等

ここからは、これまで管見に及んだ「道明寺鷄鳴説話」を載せる、天神縁起、縁起絵、絵本説本を私見を述べつつ列挙紹介してみたい。²⁰

（なお「鷄鳴説話」の場面の絵（図）のあるものは*を付し、本稿巻末図版頁に掲載しておいた。）

- ①道明寺縁起・(A) 冊子本
- ②道明尼律寺記・(B) 道明寺本 享保十年(一七二五) 奥書 (※図1)
- ③道明尼律寺記・(C) 道明寺天満宮本 (※図2)
- ④北野天神縁起絵 扇面貼交屏風 (※図4)
- ⑤菅家瑞応録 (『神道大系神社編北野』所収)
- ⑥太宰府天満宮故実 貞享元年(一六八四) 貝原益軒著 (※図3)
- ⑦北野天神縁起絵巻 三田本 元文五年(一七四〇) 補作 (※図5)
- ⑧高山縁起 寛延三年(一七五〇) (※図6)
- ⑨天神縁起絵 大阪天満宮掛幅本 (※図8)
- ⑩天神縁起絵 光本 嘉永五年(一八五二) (※図7)
- ⑪天神縁起絵 上関本 明治五年(一八七二) (※図9)
- ⑫菅家実録 (『天神伝説のすべてとその信仰』所収)
- ⑬菅家世系録 文化六年(一八〇九) 玉田永教著
- ⑭絵本菅原実記 文化七年(一八一〇) 法橋巨勢秀信作
- ⑮天満宮御伝記略 文政三年(一八二〇)
- ⑯天満宮実伝図会 天保八年(一八三七) 貝原翁元稿 梅園主人収録 溪斎英泉画 (※図10)
- ⑰天神一代記図会 嘉永八年(一八五五) 序

「道明寺鶉鳴説話」をめぐって

⑱ 天神縁起絵 道明寺天満宮掛幅本 安政五年（一八五八）（*図9）

⑲ 天神記図会（菅原垂跡要記） 慶応元年（一八六五） 北野祠僧蓮了述

⑳ 絵本天満宮実伝記 明治十八年（一八八五）（*図13）

㉑ 菅公御一代記（今古実録²¹） 明治十九年（一八八六）

㉒ 菅公御一代記（絵本実録） 明治十九年（一八八六）（*図11）

㉓ 菅原天神御一代記 柳葉亭繁彦 明治二十年（一八八七）

㉔ 菅丞相 少年文学第廿四編 遅塚麗水著 明治二十七年（一八九四）

㉕ 菅公 日本歴史譚第五編 大和田建樹著 明治三十年（一八九七）

以上が、「道明寺鶉鳴説話」を載せるものであるが、以下参考に「道明寺説話」を載せないが、注記にも示したように、別の場所で「鳴けばこそ」の歌の採用するもの、「飛梅」「枯桜」「追松」説話の展開が認められるものなど、近世の天神縁起類の様相を示し看過できない作例を挙げておく。

「菅家寔録」（松本愚山著、寛政十年序）、「梅城録」（群書類従神祇卷二十）、「天満宮御伝記略」（平田篤胤著、文政三年刊）、「天満宮縁起元禄本」（太宰府天満宮所蔵）、「菅家御伝記」（菅原陳経著、群書類従神祇所収）、「神道集卷九 北野天神事」、「安楽寺本北野天神縁起」（群書類従神祇卷第七十七所収）、「飛鳥井本北野縁起」（群書類従神祇卷第十九所収）、「天神本地」²⁴（『室町時代物語集』第一所収）、「天神記（絵巻）」²⁵（『室町時代物語集』第一所収）、「奈良絵本てんしん」（『室町時代物語集』第一所収）、「奈良絵本かむ丞相」（『室町時代物語集』第一所収）、「洛陽北野

天神縁起」(『神道物語集(一) 伝承文学資料集第一輯』所収)、「天神のゑんき」(『神道物語集(一) 伝承文学資料集第一輯』所収)

それでは上記の「道明寺鶏鳴説話」を収載する作品のうち、おもに絵(図)をもつものについて見ていくことにしたい。

②道明尼律寺記・(B) 道明寺本 享保十年(一七二五) 奥書

(図1)

③道明尼律寺記・(C) 道明寺天満宮本

(図2)

この2件は天満宮本が道明寺本の「写し」と思われる。²⁶ 全三巻のうち巻中第五段、道明寺で道真が十人の化人に助けられながら似姿の木像を制作する場面。吹抜屋台式に描かれる邸内は、夜のこととして蠟燭に灯りが点され、束帯姿の道真と白い狩衣姿の化人たち、その左の屋根の上に雌雄の鶏が描かれている。これは同絵巻、巻中第五段の詞書を忠実に絵画化したものと認められよう。その詞書は以下のとおりであるが、先述したように冷静で客観的な語り口であることが理解されるだろう。

醍醐天皇延喜元年、丞相五十七歳太宰権帥に左遷せられ給ふとき、一夜いとまをゆるされたまひ、當寺に立よりて、御わかれのかたミとて、仏舍利五粒を覚寿尼にまひらせ給。御わかれをおしミ、「丞相の御すがたをうつしてとどめ給へ。」と、こひたまひしかば、木像にきざミて残し置給ひぬ。此とき、いづくともなく、十人の化人現じて、たすけつくり侍り給へバ、一夜のうちに彫刻せりとなむ。まことや、丞相は、十一面觀音の権化といへば、さるべき表相あらむ。そのときもちひ給ひし小刀、今にあり。夜もすでに更行ままに、庭鳥の声きこえければ、丞相、

「道明寺鶉鳴説話」をめぐって

「なけばこそ別れもうけれ、鳥の音のなからんさとのあかつきもかな」

と、詠じ給ひて、たち出給へり。五粒の舍利、今なを光明かがやきておハしませり。

④北野天神縁起絵 扇面貼交屏風（大阪・道明寺天満宮）

（図4）

先述した第15番の扇面で、覚寿尼との別れの場面として描かれる。この図には、場面設定、詞、詠歌、図様に他の例に見られない重要な点がある。まず画面上部に配された金雲の上に墨書される詞をみれば、

従土師里赴太宰府図

こち吹は匂ひをこせよ梅の花あるしなしとて春を忘るな

桜花主を忘れぬ物ならはふき来ん風のことつてをせよ

此桜春風不開夏不茂恋色人倫猶勝

庭に降り立つ束帯姿の道真と尼僧姿の覚寿。道真は咲き誇る紅梅と桜花に上記の歌を詠みかけて、覚寿はそれを見守りながら涙を抑える別れ出立の場面として描かれている。この場で覚寿尼は多くの場合、袈裟、頭巾を着ける姿に描かれるが、ここでは露頂であり、これは管見に及んだ唯一の例である。また通常、都の紅梅殿で詠まれるはずの「東風ふかば」の歌がここに記されるのは、先ほども述べたように（A）冊子本の記述に従うものと認められよう。²⁸しかし、木像と鶉は、この扇面にも、他の扇面にも描かれていない。15番の扇面（および14番紅梅殿別離も）が、他の扇面とは絵の様式を異にし、制作時期の下がる（江戸時代半ばごろ）というのは大方の見解の一致するところである。この補作ないし改変が如何なる意図で行われたかが問題である。道明寺への施入の後に、ご当地の伝承に合わせて改

変せられたと考えてみたいところだが、この扇面本と密接な関連が想定される「国学院大学卷子本」⁽²⁹⁾には、この場面がなく、「道明寺七堂伽藍」の様子が描かれるなど、いまだ検討の余地がある作例である。

⑤菅家瑞応録（『神道大系神社編北野』所収）

先述のように、道明寺説話を考察する上で重要であるばかりでなく、とくに縁起説話の面における近世の天神信仰の様相を見る上で欠かすことのできない資料である。

「鶏鳴説話」についても看過できない内容があるが、それらが後の展開のもとになっていると考えることができるからである。先に挙げた以外の独自で重要と思われる項目を挙げておこう。

- ・手つから尼公の御面兎を写し止め、又自身の御姿を鏡に移して留之、尼公に勧め玉へは…
- ・鳴けはこそ別れをいそげ鳥の音の聞へぬ里の暁もかな
- ・菅公の御名を取て後に道明寺と名く…

すなわち、覚寿の姿も写したこと、鏡に姿を写したこと、「鳴けばこそ」の歌が「いそげ」「聞えぬ」となること（おそらく最も古い例か）、道明寺改名が道真の名に因むことなどが注目される。

⑥太宰府天満宮故実 貞享元年（一六八四）貝原益軒著

「鶏鳴説話」の箇所を全文引く。

河内の國土師の里、菅公の御おは覚寿と申せし人おはしけるに、立よらせ給ひ、御わかれおしませおはしましけ

「道明寺鶉鳴説話」をめぐって

るに、鶉のなきければ御うたあり、

なげはこそわかれをいそげ鳥の音の聞へぬ里のあかつきもかな

夫より此さとに鶉を飼すとなんいひ伝へ侍る、(太宰府の里にも、今にいたるまで鶉を飼ぬも此故にや)土師の里、今は道明寺と言、爰にも天神の御やしる有、村上天皇天曆元年にはしめてたつとなん。

このようにたいへん簡潔な形で「鶉鳴説話」が収載されるのであるが、こうした簡潔化は後の類型になるといえる。つまり、覚寿とのかかわりや、似姿の木像にはそれほどの興味を示すことのない態度といえるかもしれない。

ここで「太宰府天満宮故実」との関連が予想される「太宰府元禄本天満宮縁起」(元禄六年、一六九三年、太宰府天満宮所蔵)に触れておきたい。この縁起には「道明寺説話」は収録されないが、「紅梅殿別離」の場面で「鳴けばこそ」の歌が詠まれる特異な展開をもち、おそらくそのことが、後にも触れる「天満宮縁起画伝満盛院掛幅本(図版14)」、「天満宮縁起画伝太宰府掛幅本(図版15)」、「天神縁起絵巻生掛幅本(図版16)」に影響していることが注目されるからである。その詞はつぎのとおり。

終に宣旨おもくして男女御子廿三人、男子四人は四方へなかせられ給ひき、おとなしき姫君は都にととめらる、いとけなき公達は、くしまいらせられける鳥の声をかきりに出させ給へき、御別れをおしませ給ひて、

なげはこそわかれもうけれ鳥のねのなからんさとのあかつきもかな

とよませ給ひける、たたさまの人の限ある罪に、況さへ離別の恨恩愛はかなしみはある事なり、まして政道詩歌につけて御情ふかかりしか、おもはずも都を出給ふ御心の中をおもひやり、世人みなおしめたひたてまつりける…

⑦北野天神縁起絵巻 三田本（兵庫・三田天満神社） 元文五年（一七四〇） 補作 （図3）

現状では絵のみで詞書をもたない北野天神縁起絵巻、三巻。制作年代、様式を異にする絵が混在し、場面に錯簡、誤解がある。第1巻巻末に道明寺にて覚寿尼が見守る中、自身の似姿の木像を制作する菅公が描かれ、その左の屋根の上に雌雄の鶏が描かれる。通常の北野天神縁起の説話にくわえて、巻上には十一面観音立像の制作、五部大乘経書写、伊勢春日八幡化現、木槌樹奇瑞、菅田八幡宮参籠、道明寺鶏鳴、宇佐龍女瑠璃壺が描かれるなど、「道明寺縁起」との接近が明らかである。

⑧高山縁起 寛延三年（一七五〇）（大阪・多治速比売神社）

（図5）

全六巻のうち、巻2、巻3、巻4が「天神縁起」になっている。「道明寺鶏鳴説話」にあたるのは、巻3第5段で、その詞書は次のとおり。

猶憐終南山回頭渭水濱とかや杜子美か心にもかよへり春の夜の闇はあやなし難波瀉みじかき芦のふしの間姨母の
覚寿のおはします河内の寺に訪て形見に影を写したまふまたきに啼く鶏のあかぬ離をおしみたまひつつ

啼けはこそ別れもいそけ鳥の音の聞えぬ里の暁も哉

すゑの世迄も暁告ることなし鳥さへしかりいわんや人おや

絵は、満月の照らす座敷、覚寿尼が見守る中、束帯姿の道真が似姿の木像（道真同様に着色の束帯姿であつて、所謂「荒木の天神」ではないのが他に類のないもの）を制作する。庭の垣上には白い雌雄の鶏がいる。「高山縁起」は、野見宿弥と当麻蹴速の相撲、埴輪制作など土師氏の記事を掲載するのだが、「道明寺縁起」からの、詞、絵画ともに直

「道明寺鶏鳴説話」をめぐって

接の影響は認めにくい。十八世紀半ばに制作された近世の天神縁起絵の作例であり、その当時の「鶏鳴説話」をはじめとする受容の様相を示す貴重な資料として更なる検討をくわえなければならぬ。

⑨天神縁起絵 大阪天満宮掛幅本³²⁾

(図8)

五幅本、各幅とも上から下へと展開、ほぼ通常の北野天神縁起に従うが、第5幅下段三場面に、大阪天満宮独自の祭事である、銚流し、御旅所茅の輪くぐり、船渡御が描かれて、同宮独自の縁起絵ともなっている。その他、道明寺での覚寿尼との別れ、博多での綱敷天神説話など、近世に人口に膾炙した説話が加えられている。落雷の場面でも雷神の姿を隠す(同様の例は津田本、近世の絵本にも)、日蔵巡歴のくだりでも醍醐帝の無惨な姿が描かれぬなどの特徴がある。天満惣会所から寄附された原本が天保八年(一八三七)の大塩の乱で焼失したため、原本の下絵をもとに絵所預・土佐光孚(一七八〇～一八五二)に新たに制作させた、という。図様は北野天満宮光起本をほぼ引き継ぐ。静的上品な近世末期の土佐派による天神縁起絵の典型的な作品といえる。

「鶏鳴説話」は、第2幅、道真と覚寿尼と狩衣姿の男(白太夫か)が描かれ、似姿の木像、鶏は描かれない。同本は、土佐派正系の制作であり、その意味においても、鎌倉時代以来の北野天神縁起絵の最後を飾る作品とみなされるが、そこに道明寺鶏鳴説話、綱敷天神説話、そして大阪天満宮の祭事(ご当地要素)が盛り込まれていることは、天神縁起絵の展開においてその終焉を示す象徴的な様相といってもよいだろう。

⑩天神縁起絵 光本 山口・光市 江ノ浦天満宮 嘉永五年(一八五二)

(図6)

⑪天神縁起絵 上関本 山口・上関町長島 菅原神社 明治五年（一八七二）

〔図7〕

掛幅形式の天神縁起絵。幕末、明治初期の制作。白太夫の登場する「菅家瑞応録」等からの影響を受けた縁起絵として注目される。両者はほぼ共通する構成をもち、第4幅に似姿の木像を前に、道真と覚寿尼、白太夫が描かれる。鶏はいない。両本は周防灘に面した比較的近い地域に遺される作例で、道真左遷途上、伝承の多い地域にこうした作例が複数遺されること、内容の面では天神縁起の系統と瑞応録等の講釈系統の融合が認められるなど興味深い作例といえる。⁽³³⁾

⑫菅家実録

『天神伝説のすべてとその信仰』（山中耕作編、太宰府天満宮文化研究所、平成四年）所収の資料。絵は伴わないが、独特の内容と語り口であり、道明寺では木像でなく「絵姿」を残す、「鳴けばこそ」の歌はなく「牛の夜鳴き」の説話になっているなど他にあまり例のない興味深い内容をもつ。これらは⑩菅公御一代記（今古実録）にほぼ同内容で引き継がれ、また⑫菅公御一代記（絵本実録）の「絵像」を残す型につながるものとなる。該当箇所を引いておく。

「道真か進奉るハ是のみ也、恋しき折の形見くさ、自筆の絵姿参らせん、永く形見とし給ふへし」

「梅あらは賤か伏やもわか住てたた邪の神はたたせし」

「小夜更てかことかましき牛声や旅のねむりの夢な覚しそ」、「西野郡に住む牛は夜なきせずと伝しも此御歌の威徳にて」

「道明寺鶉鳴説話」をめぐって

⑬菅家世系録 文化六年（一八〇九） 玉田永教著

全編神道を擁護する立場からの執筆と思われる内容の書である。

○道明寺ノ縁起ヲミルニ別レハ憂ケレト有リイソゲノ意味深カ今ニ河州土師ノ里ニ鶉ヲ養ヌハ此縁ナリ

尼公は目（ナミダ）を押へたまひ我は最早余命もなし重ての対面も計かたし何ぞ筐を残されよ菅公も御泪を拭せたまひ畏り候と衣冠を脱で掛させたまふの木像一ツ是を筐と残したまふ緞紳の人は官服を脱で木像に掛置と云後細密に彫刻して今道明寺の神体とす

○寛政年中浪華西天満ノ神明ニテ開扉アリシヲ永教拝セシニ甚ダ大キク奇妙ノ尊像ニテ御眼色聊御怒ノ体ナリ御屈愁ノ倂恐入テ二目トモ拝シカタシ

ここに引いたように、「鳴けばこそ」の歌の異動について言及し、道明寺の御神体が出開帳されたときの体験を語るなどの項目が注目される。

⑭絵本菅原実記 文化七年（一八一〇） 法橋巨勢秀信作

江戸時代後期における通俗的な天神縁起の集大成。従来の北野縁起を基底としながら、俗説も多数（とくに後半、巻3以降）取り入れている³⁴。挿図も多数あるが、残念ながら道明寺説話には絵がない。

⑰天神一代記図会 嘉永八年（一八五五）序³⁵

（図版10）

近世の絵本読本の形式、様式を色濃くとどめる作例である。図様は木像を中心に菅公、覺寿（「おばぎみ」）、春彦？

の三人が配される。これは光本、上関本と同様で、大阪天満宮本に近いが、覚寿が尼僧姿でないことが注目されよう。また「鳴けばこそ」の歌第二句が「名残をおしめ」となっている。

⑱天神縁起絵 道明寺天満宮掛幅本 安政五年（一八五八）

（図版9）

幕末期に制作された「一幅形式の天神縁起絵³⁶」で、類似内容のものが知る限りでも数例知られるが、「道明寺説話」が描かれるのは2例確認できた。掲載したのは道明寺天満宮に二本所蔵されるうち「安政五年」の年紀をもつ一本であり、「道明寺叔母尼御留別乃図」と題された区画に、邸内で狩衣姿の道真が覚寿尼と姫（「手習鑑」苅屋姫が紛れ込んだものか）と別れを惜しむ情景が描かれている。（同本は時平が叔父の北の方に恋慕した説話を収録するなど近世末期の天神縁起絵の様相を示す。）さらに別本として、WEB上で知りえた作例もある。同様の一幅形式の縁起絵で、「道明寺送別」と題した場面があり、朝まだきとて警固の士が松明を持っているなか、覚寿尼が門の外まで道真を送り出す珍しい図様である。

⑳絵本天満宮実伝記 明治十八年（一八八五）伴源平編

（図版13）

土師里へ赴く前に「佐田村」の里長が登場し、現在の「佐太天満宮」の由緒を語る点が注目される。挿絵は木像を刻む道真の姿だが、所謂、実録風の画風といえよう。

㉑菅公御一代記（絵本実録） 明治十九年（一八八六）網島亀吉編集発行

（図版11）

「道明寺鶉鳴話」をめぐって

図版にも示されるように、「木像」でなく「絵像」であることが大きな特色となっている。覚寿がひろげ持つ立像の似姿である。

御伯母君おどろきたまひ、暫し涙だに哽び更に言葉もなかりしが、御歎きを慰め菅公自ら繪像を御写あり、其上に一首を「梅あらばしづがふせやもわれすみてただよこしまの神はたたせし」と詠して御わたしありしに、浅からず御よろこび御床へぞすへられける、この御繪像御身がはりに立しといふ…

また「絵像」が身替りに立つというのも注目される（「手習鑑」の影響か）。「梅あらば」の歌（「鳴けばこそ」でない）は、上記⑩菅家実録および⑪菅公御一代記（今古実録）にも載り、それらとの関連が予想される。図様の特色としては、覚寿が尼僧姿でなく、道真が撫でつけ髪であることもめづらしい。

その他、管見に及んだものは、「実録一席講談」（明治二十二年、図版12）であるが、この図像は歌舞伎「手習鑑」からの借用と思われる。画中の文字は「かんせうぜう つくしへくだるとちう かはちのはじむらへ 立よりたまふはんぐわんだい てるくに けいごす いまのどうみやうじ これなり」と記される。

最後に、「道明寺」の場面ではないが、「別れ」の場面で「鶉」が描かれる作例を挙げておく。

満盛院掛幅本（太宰府天満宮、図版14）、太宰府掛幅本（太宰府天満宮、図版15）、菅生掛幅本（大阪・菅生天満宮、図版16）、これらにはいずれも「道明寺」の場面は収載されず、「紅梅殿別離」に鶉が描かれる。これら三件の図像は、先述のように「太宰府元禄本天神縁起」（元禄六年、一六九三）の記述によるものと考えられる。¹⁷⁾

また北野天神縁起絵巻佐太文安本（大阪・佐太天満宮、文安3年、一四四六）では「道明寺」の場面はなく「紅梅

殿別離」に鶏が描かれもしないのだが、「左遷船出」の場面、浜辺の家屋の屋根の上に雌雄の鶏を描いている。「鶏鳴」と「別れ」の関連、連想が生み出した図様ではないかと想像しているが、次の船に近づく女性ともども他に類例のない図様であることを指摘しておきたい。

結びにかえて

以上のように、天神縁起絵、絵本読本の類から、「道明寺鶏鳴説話」の場面が描かれているものを挙げてみようとしたのだが、意外なことに作例は少なく、明治になっても数例が認められるにすぎないのである。これは北野天神縁起絵の伝統になかった場面であるため、図様のパターンが確立しなかったためとも考えられるだろう。

「道明寺説話」では、その初期の段階で、「覚寿」の扱いに象徴されるように、「道明寺の縁起」への方向性と、御霊信仰の要素を色濃く反映する「天神信仰」（ないし「菅公物語」）への方向性が見られたように思われる。それらは綯い交ぜになって、冊子本から尼律寺記へ整理簡略化される段階で、覚寿と道真の関係もやはり整理されて、道明寺は菅原家の氏寺としての性格、あり方へ収斂していったように思われる。

道真その人への尊崇、人格への崇拜が、この信仰に支配的になったとき、「道明寺鶏鳴説話」は、左遷途上の一挿話としてのみ永らえることになったように思われる。近代における道真像の「忠誠の臣」への傾斜は、時代の要請であったのは確かであろうが、しかし、すでに近代以前の道真像にもその兆しがあったことが認められるだろう。そして、覚寿と道真のかかわりを軸に展開させたのは、おそらく、本稿にはほとんど触れることのできなかつた浄瑠璃「菅原

「道明寺鶉鳴説話」をめぐって

伝授手習鑑」なのであって、とくにその歌舞伎劇への移植、さらには、その近代に至る演出や解釈の洗練と変遷が、現代のわれわれにも「道明寺鶉鳴説話」の謂わば「古層」を垣間見せてくれることになるのではないか、と思われる。「近代の菅公イメージ」形成を知るためにも、われわれは次に「手習鑑」の描く世界へ進まねばならないだろう。

(付記)

本稿作成にあたり、調査等にご高配を賜ったご所蔵者各位に御礼を申し上げます。

データ整理に芸術学研究室・吉田公樹君、鈴木早希子さんの助力を得たことを記し謝意を表します。

本稿は科学研究費補助金交付を受けた研究課題「菅公イメージ」変遷の総合的研究」(課題番号18S20075)の研究成果の一部である。

注

- (1) 第二句、第四句はそれぞれ、「別れをいそげ」「きこえぬ里の」と表記されることもある。ここでは「道明寺縁起」(後述)の記述、および現在、道明寺・道明寺天満宮での表記(「うけれ」「なからむ」)に倣う。
- (2) 道真の曾祖父・古人のときに、土師氏から菅原氏に改姓。
- (3) 天神縁起絵の概要・展開について近年の研究成果は次の文献を参照。『天神さまの美術展図録』(平成十三年、東京国立博物館他)、須賀みほ『天神縁起絵の系譜』(平成十六年、中央公論美術出版)
- (4) 多くの論者の指摘があるが、林屋辰三郎「天神信仰の変遷」(『新修日本絵巻物全集』一〇、角川書店、昭和五十二年)における議論がその枠組みを明快に示す。

- (5) 拙稿「天神縁起絵の諸相——その系譜と展開考察への覚書」(『国文学 解釈と鑑賞』八五一号、平成十四年四月号、至文堂)にその概要を示した。また同「近世における北野天神縁起絵巻の制作」(竹居明男編『北野天神縁起を読む』、平成二十年、吉川弘文館)は、天神縁起絵の変遷をたどってその検証を試みたものである。
- (6) 制作時期が十六世紀前半にさかのぼる「道明寺天満宮所蔵扇面貼交屏風」に道真と寛寿を描く「土師里別離」の場面(図版4)があるが、絵としては近世の補作と見られること、「鳴けばこそ」の歌が登場しないことから、ここでは除外しておきたい。
- (7) 「道明寺」の上演の記録としては、天文元年(一五三二)五月二日、一条西洞院(『言継卿記』)、永禄十一年(一五六八)六月二十四日、山城松尾神社(『言継卿記』)があるという。(竹居明男(講演資料)「道明寺・道明寺天満宮とその周辺——河内国と天神信仰・序説——」(説話文学会例会、二〇〇四年十二月十一日、道明寺天満宮))
- (8) また永原順子氏によれば、謡曲は道明寺縁起を素材としたと考えるのが常識的であるが、成立時期は逆である可能性もあるという。竹居明男「平安時代中期の河内国府周辺と天神信仰——明法家惟宗允亮の編著『政事要略』の記事をめぐる」(『文化史学』五五号、一九九九年)
- (9) 現本尊(国宝)および「試みの観音」(重要文化財)。前者は中国唐風の強い影響を受けた檀像彫刻、制作は天神信仰がおこる以前の9世紀と考えられる。
- (10) 『道明寺天満宮宝物選』(二〇〇七年、道明寺天満宮発行) No.32参照。
- (11) 前掲、竹居論文。
- (12) これまで若干の混乱があったが、『藤井寺市史 補遺編』(二〇〇三年)および小林健二「道明寺・道明寺天満宮の再建と縁起絵制作」(『説話文学研究』第四一号二〇〇六年所収)に集成整理された。なお、以下本稿での「道明寺縁起」等テキストの引用は、『藤井寺市史』等を参照しながら、句読点、漢字仮名文字の使用を私に改めたところがあることをご了解いただきたい。
- (13) 中村幸彦「菅家瑞応録」について、「菅原道真と大宰府天満宮(上巻)」所収、南里みち子「菅家瑞応録と天神縁起」(長崎県立大学論集 No.2・3、一九九四年)、同「菅家瑞応録と天神縁起」(長崎県立大学論集 No.4、一九九四年)
- (14) これをうまく取り込んだのは、近代の「菅公物語」である。例えば「講談社の絵本 菅原道真(天神様)」(昭和十四年、大日本雄弁会講談社)。道真は、父を亡くし、母の看病を熱心に行い、その菩提を弔うために母の信仰していた観音像(その図像はあきらかに

「道明寺鶉鳴説話」をめぐる

道明寺本尊の十一面観音菩薩立像を自ら彫刻する。同絵本には、いわゆる「道明寺説話」は描かれないが、十一面観音制作、親孝行という要素がたくみに取り込まれたものといえる。「近代の菅公イメージ」は、近代国家形成、天皇制のかかわりで、「忠臣・道真」の側面が強調されると思われるが、その様相については稿を改めて論じたい。

(15) もと奈良高市郡に伝わったもので江戸時代半ば、享保から永享年間に道明寺に施入されたと考えられている。山本五月「室町期の北野天神縁起絵——道明寺天満宮蔵「扇面貼交屏風」を中心に——」（『説話文学研究』第四一号二〇〇六年）、同「道明寺天満宮蔵へ北野天神縁起絵扇面貼交屏風」の特質——モチーフ絵画化の観点から——」（『国華』第一三二七号）

(16) 多くが「金雲」を用いるが、金雲を用いず「雲母」を用いるもの（扇面番号②⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺）あり、両者には岩や樹木の描法、奥行表現にも相違があると認められる。さらに扇面⑭⑮は明らかに制作時期の下る二面である。

(17) 前掲、山本五月論文参照。

(18) 前掲、林屋論文参照。雨乞神事、雷神信仰など、農業神としての天神信仰を基盤に、道真を御霊とする信仰とが融合して、現在に至る「菅公の天神信仰」になったと考えられる。道真以前の天神信仰は、北野天満宮の祭事等に現在まで引き継がれているとみなすこともできる。

(19) 太宰府十二幅本第六幅第二段は、菅生本第七幅第三段と同じく「船路配流」と「綱敷天神」に挟まれる場面であるので、「明石駅長」であるはずだが、太宰府本では駅長（男性）に当たる人物が女性として描かれている（菅生本は男性）。両本とも背景は海辺を示す波も描かれているので明石の場面であろうが、太宰府本の混乱は道明寺説話「土師里別離」とのいわば習合の結果かと思わせる。

(20) ただし、先述の道明寺縁起の（D）（E）（F）各本については（B）と同一内容であるので省略した。また浄瑠璃・歌舞伎「菅原伝授手習鑑」に関する芝居絵浮世絵類はここに採り上げていない。また明治期の講談本も採り上げていない。これらについては、「道明寺鶉鳴説話」の流布に、実のところ、最も与って力のあったものと考えられる。資料の整理分析の進捗および紙幅の関係から別の機会に譲り、稿を改めて論じる。

(21) 「道明寺説話」は⑫「菅家実録」と同内容である。

(22) 上巻末あたりに「東風ふかば」「梅は飛び」「君が住む」「鳴けばこそ」の歌あり。下巻、「日蔵六道巡り」、メトロポリタン本の行者姿であることが注目される。

- (23) 「紅梅殿別離」の場面に「鳴けばこそ」の歌がある。(おそらくこれをうけて、太宰府十二幅本、満盛院八幅本、菅生掛幅本には、紅梅殿に鶉が描かれるものと思われる)
- (24) 慶安元年(一六四八)奥書。「飛梅説話」、「枯桜説話」があり、「梅はとひさくらはかる世の中になにとて松のつれなかるらん、かやうにうちななめたまへは、梅のあとをおひきたるによつて、おひ松の神とは申は、此ゆへなり」としるし「老松(追松)説話」を収録することが注目される。
- (25) 「東風ふかば」を太宰府の配所で詠む。
- (26) 詞書は(B)道明寺本に省略のことが指摘されるが(前掲、小林健二論文、絵については、その「外題」にあるとおり、天満宮本が「膳(うつし)」とみなされる。
- (27) 図版頁に同場面を掲載したが、(C)天満宮本(図2)では化人が九人しか確認できない。
- (28) 前掲、山本五月論文も参照のこと。
- (29) 国学院本は、描かれる建物の角度など扇面本の図様をそのまま写した痕跡が認められる(少なくとも共通祖本を考慮すべきである)。
- (30) 『天神さまの美術展図録』作品解説においてこの場面を「長谷寺縁起執筆」としたが、「(土師里)大乘経書写」とみなすのが正しいと思われるので訂正しておきたい。
- (31) 「堺市美術工芸品調査報告書 第一集」(一九九五年、堺市教育委員会)、黒木祥子「資料紹介『高山縁起』——近世神社縁起の手法——」(『伝承文化の展望』二〇〇三年、三弥井書店)も参照のこと。
- (32) 拙稿「雷神と鶉のいない天神縁起絵——大阪天満宮掛幅本天神縁起絵の一面——」(『大阪の歴史と文化財』第一〇号、二〇〇二年一〇月、財団法人大阪文化財協会)
- (33) 拙稿「渡会春彦(白大夫)の登場する天神縁起絵」(『全国梅風会会報』四〇号、二〇〇七年)にその概要を示した。
- (34) 横山邦治「近世文学と菅原道真 読本における道真像を中心に」(『菅原道真と大宰府天満宮(上巻)』所収)
- (35) 嘉永六年十一月二十七日で「安政」に改元のため正しくは安政二年(一八五五)。このために序文に「嘉永八年乙卯孟春」と記されたものと思われる。
- (36) 一幅のみ、コマ割に区画した場面形式の天神縁起絵で、所載の説話に若干の異同もあり、結末の創建される神社が北野天満宮のもの

「道明寺鶉鳴説話」をめぐって

のと太宰府天満宮のものがある。各地に類品が散見され幕末頃に比較的多数制作されたと見られる。

(37) 「太宰府元禄本縁起」、「太宰府掛幅本縁起絵」、「菅生掛幅本縁起絵」の関連については、拙稿「菅生天満宮所蔵・掛幅形式の天神縁起絵について」（『太子信仰と天神信仰の比較史研究』所収、思文閣出版、二〇〇八年刊行予定）参照。



图1 道明尼律寺記（道明寺本） 卷中・第5段



图2 道明尼律寺記（道明寺天満宮本） 卷中・第5段



图3 北野天神縁起絵卷（三田本）
第1卷・卷末

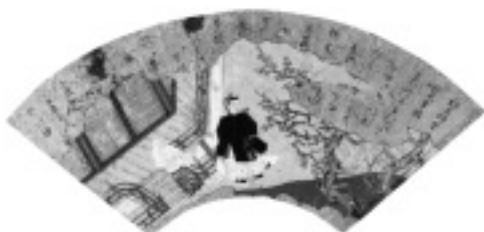


图4 北野天神縁起絵 扇面貼交屏風
（道明寺天満宮） 扇面・第15番



図5 高山縁記（多治速比売神社） 卷3・第5段



図6 天神縁起絵（光本）
第4幅



図7 天神縁起絵（上関本）
第4幅



図8 天神縁起絵
（大阪天満宮掛幅本） 第2幅



図9 天神縁起絵
（道明寺天満宮）

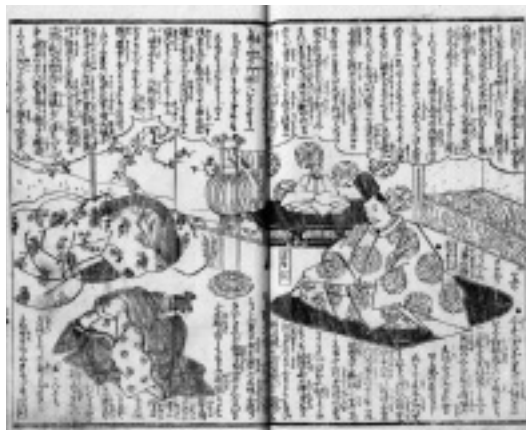


図10 天神一代記図絵（嘉永8年序）



図11 絵本実録 菅公御一代記（明治19年）



図13 絵本天満宮実記
（明治18年）

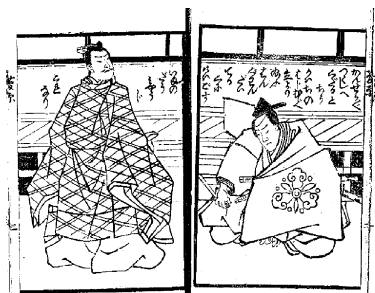


図12 実録一席講談
（明治22年）



図 14 天満宮縁起画伝（満盛院掛幅本）
第 3 幅 [紅梅殿別離]



図 15 天満宮縁起画伝（太宰府掛幅本）第 5 幅 [紅梅殿別離]



図 16 天神縁起絵（菅生掛幅本）第 6 幅 [紅梅殿別離]